

アフリカ現代史I

第2回 アフリカ概説 地理・自然・民族

1. アフリカの地理

- アフリカ大陸 総面積約3030万km²
- 北緯37度～南緯35度、南北で約8000キロ
- 東西の幅は最長で約7400キロ
- 広大な大陸と周辺に諸島嶼 最大はマダガスカル
- 大陸の約60%は海拔500m以上
- アフリカ最高峰のキリマンジャロ山(5895m)、第2位のケニア山(5199m)
- エチオピア高原 3000m、ナイロビ 海拔1700m

- アフリカ4大河川: ナイル川 全長6690km、ニジェール川 4180km)、コンゴ川(ザイール川) 4370km、ザンベジ川(2740km)
- 大地溝帯(Rift Valley) : アフリカ東部を南北に走る巨大な谷

砂漠 アフリカ大陸の地理的特徴の一つ

- サハラ砂漠 アフリカ大陸の面積に占める割合 3分の1
 - ナミブ砂漠 アフリカ南西部、東側にはカラハリ砂漠
- 砂漠＝不毛の地？

👉 縦断する交易ルート & 地下資源

2 アフリカの気候と植生

気候 多様、大枠では南北対称

- 赤道 熱帯降雨林、年間の雨量は1500～2000mm、湿度も高い
- キンシャサ 年平均湿度80%
- カメルーン山の南西 年間降雨量 1万mm
 - ☞ サハラ砂漠の年間降雨量は10mm
- 熱帯降雨林の南北および東側へ湿潤サバンナ、乾燥サバンナ、砂漠、半砂漠地帯、最北端と最南端に温帯地中海性気候

乾季と雨季 その間に小乾季

アフリカ高地 温度も湿度もさほど高くない

- ナイロビ 平均最高気温は30°C以下
- アディスアベバ 標高2400m 平均気温30°C以下

国内での気温差あり

- * モンバサとナイロビ(1700m) 気温差は平均9°C
- * 南ア インド洋側 暖流、大西洋側 寒流

3 民族と言語

(1) 人種・民族・部族

① 人種

- 三大人種: コーカソイド(白人種)、モンゴロイド(蒙古人種)、ニグロイド(黒人種)
- アフリカではニグロイドが多い→スーダン亜型、ギニア亜型、コンゴ亜型、ナイロティック亜型、ザンベジ亜型
- 南部アフリカ: コイ(ブッシュマン)、サン(ホッテントット)
- コンゴ盆地からカメルーン: ピグミー
- エチオピア人種
- 北アフリカ おもにコーカソイドが居住 アラブ系人、ベルベル人、ミックスや地中海人種なども
- その他にヨーロッパ人、インド人、マレー系人などが移住

②民族・部族

- 定義 客観的条件(文化、言語、伝統などを共有)
&主観的条件(自らの認識、他のメンバーからの認知)
- 民族と部族の分け方:部族を民族の下位概念とする見解☞差別的・偏見的な要素、政治性
- 本講義では、人種、言語、文化的伝統を共有する歴史的集団を民族とする

アフリカの国家 民族のモザイク国家

- ナイジェリア イボ、ヨルバ、ハウサが3大民族
- コンゴ民主共和国 コンゴ、ルバ、ルンダ、モンゴ等
- ルワンダ・ブルンジ ツチ、フツ、トゥワ
- エチオピア アムハラ、ティグレ、オロモ、シダモ等

👉 アフリカ大陸 多民族モザイク大陸

(2) 言語

- 民族言語 2000～3000

J・グリーンバーグの分類 4大語族

- アフロアジア語族
- ナイルーサハラ語族
- ニジェールーコルドファン語族
- コイサン語族

母語

＊ ニジェールーコルドファン語族：アフリカ大陸独自の言語

● スワヒリ語はこのグループのバンツー語族の一

＊ ナイル・サハラ語族：サハラ砂漠からエチオピア、ソマリア、ケニア北東部、タンザニア北部、ナイジェリア、チャドの一部

＊ コイサン語 南部アフリカのコイ、サンなど

＊ マラガシ語 マダガスカル

公用語

- 植民地宗主国の言語→公用語
英語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語
- 北アフリカ アラビア語
- 南ア アパルトヘイト時代の公用語(英語とアフリカーンス)＋アフリカン言語(ズールー語、コーサ語、ツワナ語など9つの言語)＝11言語が公用語
- アフリカン言語を公用語としている国は少ない

(3) 文化

民族文化 多様

- 宗教の多様性：外来の宗教（キリスト教、イスラム教、ヒンズー教）＋伝統的宗教

国民文化の創造（？）

☞ 多様な民族文化を国家建設という課題を追求するためにトップダウンで文化を構築する試み

- タンザニア
- ザイール（現在のコンゴ民主共和国）

「文字」がないという神話

1) 独自の文字文化

- エチオピア アムハラ文字
- リベリアのヴァイ人のヴァイ文字
- 北西カメルーンのバムン人のバムン文字

2) 他の伝達手段

- 口承伝承
- ドラムランゲージ

4 アフリカの多様性

- 前回のクイズの答え

①人類発祥の地

②コーヒー

③国民一人当たりの米消費量が日本より多い国

④韓流ブームで経済効果

⑤1990年代まで女性のズボン着用禁止

⑥ノーベル文学賞受賞者多数

⑦ダイエットブームで経済効果

⑧1997年の経済成長率71%の国

⑨独立以後、一度も内戦がおきていない国

⑩世界で最も新しい国

(1) 国家間の多様性

面積、人口（人口密度）、気候・自然、文化、歴史
政治体制、経済政策、天然資源

(2) 国内の多様性

- 所得格差 GINI(ジニ)係数

南ア 0.63

ケニア 0.49

ナイジェリア 0.43

エチオピア 0.33

5 アフリカ史の虚像と実像

- 世界近代史のなかのアフリカ マイナスのイメージ
なぜ、そのようなイメージが創られたのか？

大航海時代の15C ヨーロッパとアフリカの不幸な出会い

- 以後のアフリカ
- 16～19C 大西洋奴隷貿易
- 19C末～20C初 植民地分割

→1950年代後半～1960代初期 独立

- ヨーロッパ中心主義的な歴史観が固定化
- ヨーロッパの優越性、アフリカ(人)の劣等生という誤った観念

アフリカに対する誤った前提

- 発展とは無関係な停滞社会
- 国家なき社会

◎しかし、アフリカは決して停滞や変動と無関係ではなく、国家なき社会でもなかった

- 古い時代から王国や首長国 興亡

主要な王国、首長国の興亡の歴史

BC9C～AD4C クシュ王国

BC1C～7C アクスム王国

7C アラブ人のアフリカ進出

8～11C ガーナ王国

11～15C マリ帝国→ソンガイ帝国(15～16C) トンブ
クツ繁栄、多数のイスラーム学者在住、学芸都市

14～19C コンゴ王国 整備された政治体制と物質文
明を有する

15C末 ポルトガル人来航→コンゴ王国とポルトガル友
好関係締結→外交使節やキリスト教ミッション、技術者
などが派遣される

コンゴ国王 キリスト教に改宗し、欧化政策

主な参考文献

- 宇佐美久美子『アフリカ史の意味』（世界史リブレット14）山川出版社
- 小田英郎他『アフリカ』第2版、自由国民社
- 川田順造編『アフリカ史』山川出版社、とくに第1章
- 宮本 & 松田編『新書 アフリカ史』第1章 & 第2章